

土蔵の見栄えを支える技術——鉢巻

早稲田大学理工学術院
准教授 山田 宮土理

土蔵の鉢巻

耐火性を確保するために木部を表しにせず大壁とする土蔵は、独特の外観をしている。様々な地域性があり個性も豊かであるにも関わらず、その建築が「土蔵」であることは一目瞭然であることが多い。それは、大壁であることに加え、開口部や戸前などの形状の特徴に共通点が多いためかも知れないが、ひときわ土蔵の特徴的な部位として鉢巻がある。

鉢巻とは、土蔵の軒裏を土と漆喰で塗り込めた部分のことである。屋根と外壁の接触部で火がこもりやすいということで、特に厚く塗り込められており¹⁾、垂直な壁面に対して張り出しているため存在感がある。明治9年発行の「初心手引 左官雛形 上」²⁾には、鉢巻のいくつかの形状と寸法の割り出し方が記載されている。図1に、この左官雛形に示された鉢巻の形状（大蛇腹、二重鉢巻、一重小蛇腹、二重小蛇腹^{註1)}）に基づき、軒先のつくりに影響する屋根形式（置屋根、塗り上げ）ごとに各地の鉢巻を例

示した。図1の右側の二列は、いわゆる鉢巻に該当しないと思われるが木部を塗り込めた場合と、鉢巻の無い場合である。実際には必ずしもこの類型に当てはまらない個性的な形状の鉢巻も多く存在している。

本稿ではこうした様々な形状の鉢巻のなかでも、置屋根形式で写真1のように大きく張り出した鉢巻が特徴的な岩手県気仙郡の土蔵について調べた内容を取り上げたい。この土蔵は明治期の建築で前号（Vol.2）で紹介した土蔵である。写真1下段のように一部損壊した箇所があり、内部の構成を把握することができた。

岩手県気仙郡の土蔵の鉢巻の構成

図2と図3は調査結果をまとめた図面である。この土蔵は置屋根形式であるため、土蔵本体の上部に載る二重屋根の木材はむき出しであるが、土蔵本体は屋根の下の全面で土と漆喰で塗り固められてい

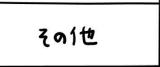
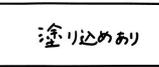
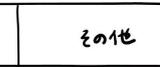
	鉢巻あり					鉢巻なし	
	大蛇腹*	二重鉢巻*	一重小蛇腹*	二重小蛇腹*	その他	塗り込めあり	その他
置屋根	  東京都	  高知県	  群馬県	  群馬県	  広島県	  福岡県	  長野県
塗り上げ	  静岡県	  山口県	  宮城県	  宮城県	  岡山県	  岡山県	  福岡県 木部が一部表し

図1 各地の土蔵の鉢巻の例 ※文献2)に基づき分類

る。土蔵本体の軒先には鉢巻が立派につくってあり、外壁面よりも450mm程度も張り出している。図4のように鉢巻は一般に、軒桁に鉢巻貫を打ち付け、これに縄を巻いた竹を留め付けて壁土を塗り付けることにつくられる^{1) 3)}が、この方法だと450mmも張り出させるには土の付け代が大きくなりすぎてしまう。ならばどのようなになっているのかというと、図2のように登梁を桁材より外部へ飛び出させ、登梁の先端に鉢巻貫をホゾで接合し、鉢巻貫の室内側に丸竹を用いた下地を斜めに取り付けていた。この飛び出した登梁と鉢巻貫、丸竹の下地が、鉢巻の出寸法を確保する骨格となっていた。

鉢巻貫には、土が付着するように縄巻竹が留め付けられており、縄には強靱で耐久性が高いとされるワラビ縄もしくはヤマブドウの蔓が使われていた。写真2では、縄は取れてしまっている箇所が多いが、鉢巻貫に縄巻竹が留め付けられている様子がわかる。図2のように、土の付け代は、鉢巻貫から160~180mmはあり、鉢巻貫の内側の竹下地からいけばもっと厚い。この分厚い土の重さを、垂直に保持する以上に重力に逆らって保持するのは容易ではなさそうである。こうした重力への逆行に対する懸念からであろうか、軽量化のためと考えられる縄巻き丸竹が塗り層内に入っている箇所があった。またこの縄巻き丸竹を覆う土塗り層には、屋根から繋がり、鉢巻の下端付近で輪にした壺縄が伏せ込まれており(図3・写真3)、この縄もやはり強靱なワラビ縄もしくはヤマブドウの蔓が用いられ、重厚な壁土の剥落を防止しようとする様子が伺えた。屋根から鉢巻に繋がる壺縄には、壁体に伏せ込まれる縄が潜らせてあり、屋根・鉢巻から壁体までの土蔵全体がひとつつながりの縄によって一体的に囲まれていた。

機能的な意味を超えた鉢巻の役割

以上のように、今回調べた土蔵の鉢巻は約450mmという大きな張り出し寸法をもち、そのために登梁を桁材の外側まで持ち出していた。耐火性の確保のためには、木部の外部側の壁土の厚さがある程度確保されていれば良いはずであり、これほどの張り出し寸法をつくらずとも、例えば図4のように登梁を持ち出さずにつくこともできたはずである。張り

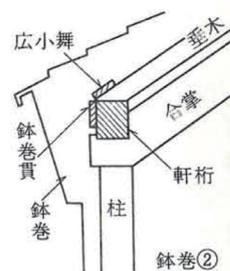


写真1 調査した土蔵の鉢巻の様子

図4 鉢巻の構成例³⁾



写真2 壁土の崩落部からみえる鉢巻貫、縄巻竹、樹皮の様子



写真3 屋根から鉢巻、壁面へ繋がる縄の様子※

※鉢巻の壁土の崩落に伴って縄が切れていたために写真では縄が垂れ下がっているが、塗付け当初の縄は屋根から鉢巻、壁面へと縄が繋がっていた様子が観察できた。

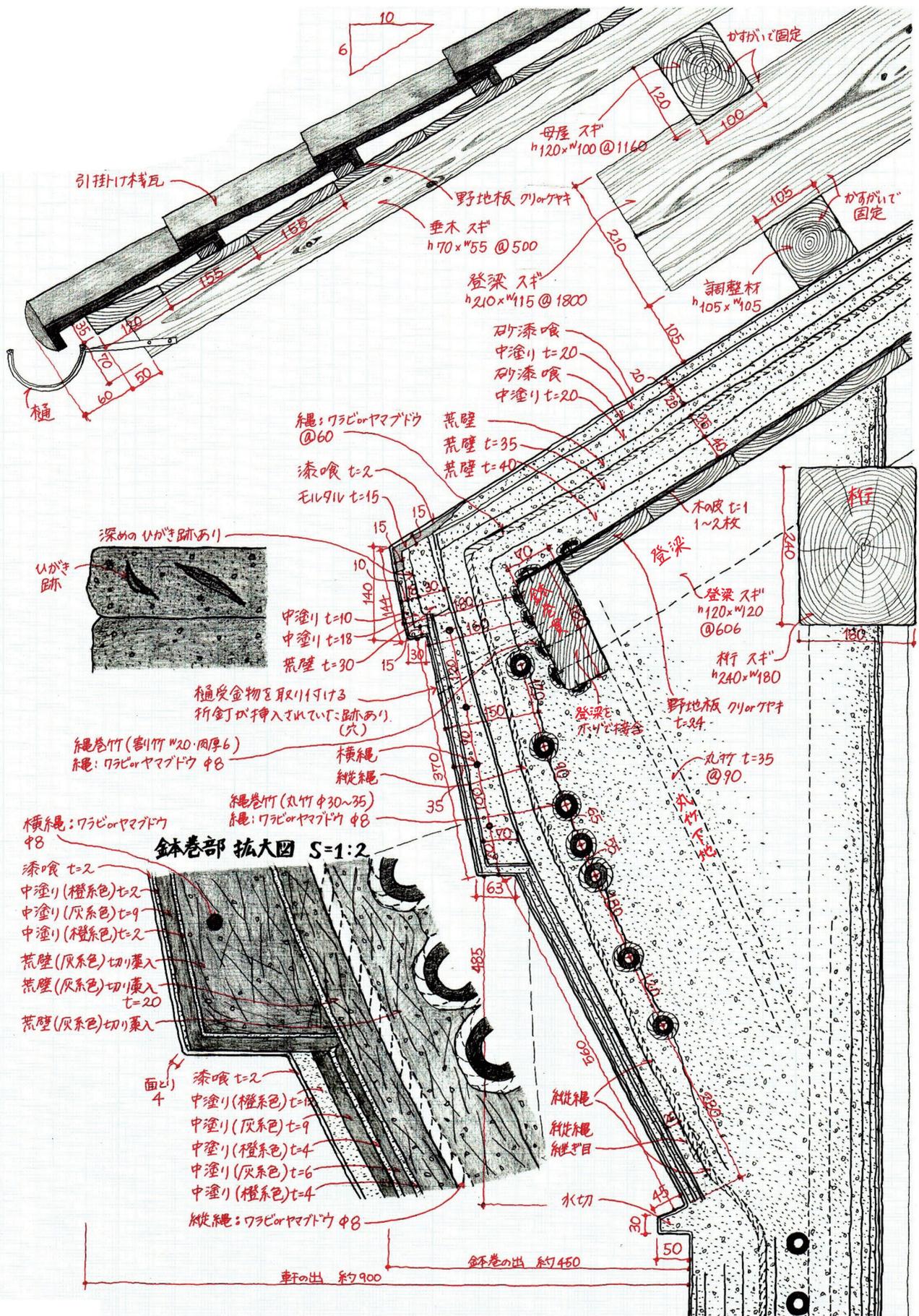


図2 岩手県の土蔵の解体調査図面例（鉢巻部断面図）

